

立命館大学大学院 言語教育情報研究科

英語教育学コース 在学生・修了生インタビュー

テーマ「仕事と研究の両立」

言語教育情報研究科の英語教育学コースは、そのカリキュラム内容から、現在中学校・高校等教育機関で既に英語教育に携わっている方が、更に高度な専門知識や実践力を修得するための場として進学されるケースも多く、「仕事と研究の両立は可能か？」といった問い合わせを志願者の方からよくいただきます。もちろんこれは英語教育学コースだけに限った話ではありません。他のコースでも同じようにリカレントやリスキング等を目的に、仕事をしながら言語を研究し、新たな挑戦をしたいという声を耳にします。両立の仕方は職場の調整度合や研究計画によってケースバイケースであり、その可否は簡単に決められるものではありません。

今回こちらのインタビューでは、休職せず、英語教育学コースを2年間で修了された方にその経緯や苦労した点、その後の現状等をお伺いし、「仕事と研究の両立」について具体的に語っていただきました。また、仕事を休職しながら現在研究をされている社会人院生の方へもインタビューしていますので、是非そちらと合わせてご覧ください。

お話を伺った方 杉本 喜孝さん(2017年3月修了)
仕事:【在学当時】京都府立高等学校教諭(英語)
【現在】大学教員(帝塚山学院大学 リベラル
アーツ学科 准教授)
在学当時の勤務状況: 教諭として通常勤務をしながら通学
入試方式: 社会人(協定)入学試験
週あたりの通学日数: 1年目(週3日)、2年目(週2日+夏
集中)



Q1_立命館大学大学院言語教育情報研究科の英語教育学プログラム(現:英語教育学コース)を選んだ理由を教えてください

初めに大学院進学を目指した理由は、新規採用された時から複数の高校、校種を経験し教員生活も30年近くになっており、積み重ねてきた経験値を教員として実践していくことに加えて、後進の育成にも活かしたいとの思いが強くなってきたからです。私が言語教育情報研究科(以下 LEIS)に入学した2015年頃は、教職離れが進む傾向が強くなり始めた時期ですが、現在はそれに拍車がかかり、自治体によっては教員採用試験の競争倍率が2倍を下回るどころも出始めています。中等教育の現場を経験した後に大学教員となることで、教職の魅力を発信できる立場となって、一人でも後に続いてくれる人材の育成に貢献できれば、無形の財産継承ができるのではないかと考えていました。

次に、LEIS を選択した最大の理由は、勤務先(宇治市)から直接衣笠キャンパスまでの通学が可能だったことです。社会人として、もし勤務しながら大学院に通学する場合、勤務先から通学可能圏内に位置する大学でないと実現は不可能です。通学する際の交通手段をどうするかは考えておくべきだと思います。特に衣笠キャンパスは観光シーズン京都市内の交通渋滞に巻き込まれると授業に遅れる可能性がありましたので、そのあたりのシミュレーションも事前に考えておく必要があります。

3つ目に、提供される科目が自分の研究に活かせるものだったからです。英語教授法はもちろんのこと、学部生時代には学ぶ機会がなかった第二言語習得論、音声学、早期英語教育論、言語テストの測定や評価に関する授業、さらには教材開発(CALL 理論を含む)演習等、高校現場での教育実践に必要な科目が多く、自分の研究と実践の両方に活かすことができると考えたからです。

4 つ目は Graduate TESOL Certificate が得られることです。私の場合、1 年目にほとんどの科目を修得し、2 年目は論文作成に時間をかけるつもりで履修計画を立てましたが、そうすることで、高校の夏期休暇を利用して、サザンクィーンズランド大学（オーストラリア 以下 UniSQ）での TESOL 資格取得プログラム（5 週間）にも参加できると考えたからです。また、UniSQ で修得した単位も修了単位として認定されることも魅力でした。

5 つ目は、他研究科で修得した単位（上限あり）も修了単位として組み込まれていることでした。初等中等教育課程の現場では、教科指導力向上の必要性は言うまでもないのですが、生徒や保護者に向き合うときの対応力も求められます。長年の経験から、引き出しの数が多ければ多いほど、さまざまな場面で活かすことができると実感していましたので、私は文学研究科と人間科学研究科の開講科目を履修しました。どちらの研究科にも社会人として活躍されている履修生がおられたので、情報交換をする中で新たな気づきを得ることができ、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。

Q2_大学院進学タイミングは何かきっかけがあったのでしょうか？

LEIS の入学年度（2015 年度）は、その年の 3 月に担任をしていた高校 3 年生たちが卒業した時期でした。勤務先の高校は 2009 年に再編開校した新たな高校でしたが、当時の校長先生は、再編校準備室時代（2005 年～）からの上司でしたので、私の「研究マインド」を知った上で、LEIS と教育委員会が協定を結んでおり、勤務しながらの通学も可能であったことから勧めてくださいました。上司の理解の下で大学院進学が実現できたという意味で、私にとっては、2015 年は人生のターニングポイントだったと思います。

そして、家族の理解が得られたことが進学を決意する最大のきっかけになりました。学費を支出することで家計への負担も発生します。仕事と両立しながら通学に要する時間と研究にける時間を確保すれば、家族との時間は減少します。修業年限の間とはいえ、家族に精神的・金銭的・時間的負担を強いることになりやすから、最大の理解者である家族の支えなくしては、実現は困難だったと思います。

Q3_研究テーマについて教えてください。また、その研究は大学院修了後ご自身の仕事にどのように役立つと考えておられますか？

教科教育実践としては、「多読・速読・音読の3活動による高校生の英語力向上」が研究テーマでした。私は 2005 年から現在まで、文部科学省検定済教科書（高校用）を執筆してきた経験がありますが、その過程で、1 冊の教科書に副読本を加えたとしても、高校生が在学期間中に読む英文量が少ないことを漠然と感じていました。そこで先行研究を調べると、語数の多い教科書を使用したとしても、ペーパーバックに換算すると数十ページにしかならず、ミステリー小説なら結論を知るところか、すべての登場人物を知らないままに授業が終了してしまうこともあり得るという現実を知ることができました。これまで感じていた漠然が瞭然に変わった瞬間でした。そして研究テーマに上記の英語 3 活動を設定した経緯が間違いではなかったという確信を得ることができました。自分自身の経験則から、英語の文章を数多く読むためには内容理解精度の向上と読解速度の伸びは不可欠であり、読みの停滞を防ぐためには音声的な基本知識とそれを実行する技術を学ぶ場が必要であることから、研究から得られた知見を現場で実践することで英語教育推進の一端を担うことを目的に、この研究テーマを設定しました。

Q2 で述べた新設高校では、英語力向上に向けて新たに CALL 教室が増設され、授業用の教材作成が必須の課題でした。時を同じくして始まった京都大学との高大連携で CALL 教材が作成されたこともあり、

「英語音声学」や「電子教材開発」の授業で学んだことを発展させる形で教材作成に活かすことができました。

私の場合、現職のまま大学院で学ぶことができたのは、データ収集の面で大きなアドバンテージだったと思います。高校 1 年生(2 クラス)の授業で、1 週間ごとに速読(CALL 教室)と多読(図書館)を実践し、そこで得たデータを基にリサーチペーパー(現 修士論文)を執筆することができました。また、大学院修了後に異動した高校では新たに附属中学校を併設することが決まっており、海外大学進学も進路選択の一つに設定して生徒募集を始めました。そこで、海外にある英会話学校との Skype 遠隔授業やオンライン多読教材の導入を検討し、そのために必要な資金を得るため、企業の教育財団が募集している実践研究助成に応募したところ、2018 年から 3 年間にわたって支援をいただきました。申請書類や報告書の完成には、大学院での研究と論文執筆が力を発揮したことは言うまでもありません。

その後も、この実践を発展させ新たな論文にまとめたり、学会や研究会で発表したりしながら、大学の公募に挑戦し続けました。大学院修了後 3 年目に、この取り組みをそのまま活かせる形での採用が決まり、現在に至っています。大学での実践報告論文が『Studies in Language Science Working Papers 2023 第 13 号』に掲載されましたので、機会があれば、御参照ください。

<https://www.ritsumei.ac.jp/gsleis/education/pdf/activities/workingpapers.pdf>

**Q4_大学院に通っていた時、仕事と研究を両立させるためにどのような工夫が必要だと感じておられましたか？
言語研の英語教育学コースに社会人として仕事をしながら進学しようとしている人にアドバイスをお願いします。**

まずは、職場の理解を得るために、自分 1 人の研究とせず、予想される研究成果をオープンにし、教育現場(職場)でも活用し得ることを先輩、同僚、後輩に理解してもらうことは大切だと思います。私は、新年度が始まる前に英語科の先生たちに、大学院進学と研究概要を知らせ、一定期間、授業の中で実践を行うことについて了解を得ました。そして、その実践研究が出口保障(大学入試)につながることを理解してもらえたことから、大学院 2 年目の夏期休暇中には、4 名の先生たちが自主的に CALL 教材作成に携わっていただきました。

ICT の発達により、日進月歩する職場を 1 人のスーパーパーソンが支える時代ではなくなった今、学校や職場をチームで動かすためには同僚性の向上が欠かせません。また、積極的に研究発表をして、他校の先生方や取引先の方にも広く研究成果を伝えることが、仲間づくりにつながります。それぞれの分野の裾野が広がるように心がけていれば、1 人の研究成果が全員の財産として受け継がれることとなり、結果的に組織の発展に寄与すると思います。

そして最も避けなければいけないのは、質量両面において仕事がおろそかになってしまうことではないでしょうか。本俸を得ている勤務校(職場)での業務こそが「本務」であって、教育(ビジネス)に資することにつながるとはいえ、「研究」はあくまで個人の興味・関心が出発点です。その点を忘れたかのような言動は慎むべきです。大学院での研究を免罪符に仕事量の軽減を期待するようでは、結果的には質の高い研究につながらないと思います。ある時、LEIS の先生のお一人から「研究の小さな種を見つけることが大変なのです」と助言されたことを今でも覚えています。日々の業務の積み重ねの中からも研究のヒントは見つかることを忘れないようにすれば、行き詰った時に何らかの示唆に気づくことができると思います。

私は、研究時間の確保のために仕事と研究の境目を明確に区切ることはせず、実務の中からも情報をキャッチするためのアンテナの感度を上げるようにしていました。大学院進学を考えるみなさんの中にはさまざまな職種の方々がおられますが、学校という限られた狭い範囲で仕事をしている教員と比べれば、社会の最前線

で仕事に就いておられる方ほど、多種多様な情報に触れる機会が多いと思いますので、それを活かすように工夫されると良いのではないのでしょうか。

Q5_入学してから修了するまでの履修のペースや職場との調整事項について教えてください。

学校現場に関して言えば、教務関係の先生たちが時間割編成作業を担いますが、常勤講師の先生の出講日や実技科目の連続授業、各種会議日の設定など、どの学校でも時間割編成には数多くの制約があります。その中に、自分の要望を組み込んでもらうためには、管理職の理解と同僚の協力は不可欠です。そこで、私の場合は2年間での修了を目指して、開講科目のシラバスを熟読した上で、自分の研究に必要な科目を最優先に履修し、次に教養を深めるための科目を選択して半期ずつの時間割を2年間分作成して、管理職や教務の先生たちの理解を得ました。

Q1でも触れたように、1年目にできるだけ多くの科目を修得し、2年目は修了に必要な単位の取得、リサーチペーパーの執筆、そしてTESOLプログラム参加のみとなるように履修計画を立てました。そうすることで、2年目に勤務校を離れる日を少なくできると考えたからです。社会人といえども、若い学生のみなさんと同様に課題の提出や試験を受けなければなりません。私の場合は、職場での業務と研究が密接に関わっていることもあり、大学院での学びと仕事の垣根がない状況でしたので、課題やテストへの取り組みに対しても、大きな障壁を感じずに2年間を過ごすことができました。

Q6_最後に、言語研に来てよかったこと、また今後に向けた抱負や力を入れて取り組みたいことなどについて教えてください。

LEISの履修科目のみならず、文学研究科、人間科学研究科それぞれで履修した科目は、すべてにおいて満足のいく内容でした。2015年度入学生(13期)の英語教育学プログラム(現:英語教育学コース)には、社会人5名、学部卒生2名が在籍し、年齢も職業もバラエティ豊かで、お互いに情報交換し助け合いながら、全員が2年間で修士課程を修了することができました。

入学試験の際に、研究科長の先生から「若い大学院生の中には教職を目指す学生も多いので、ぜひ手本となって後進を育ててください」と言われました。また、課外活動の一環で、模擬授業をして意見交換する場を設定してくださったので、私も参加して、自分の教授スタイルを批評してもらえたことも貴重な機会でした。若い世代の人たちの「手本」となるには、大学院の成績が恥ずかしいものではないという、自分自身に対して良い意味のプレッシャーを与えたことで、奨学金獲得という副産物を手にすることもできました。

また、現職身分のまま大学院に通うことは、現場で教えている高校生たちには良い刺激になったようです。面談の際に多くの保護者からいただいた「先生が勉強されている姿が何よりの教科書です」というコメントや、昼休みに私が校門を出ていく姿を見て、「先生、行ってらっしゃい!」と声をかけてくれたことが、そのことを表していると思います。

TESOLプログラムに参加する時には、研究科長の先生から家族同伴を勧めていただき、当時中学校に入学したばかりの子どもにはかけがえのない経験となりました。事務局の担当の方にはホームステイ先の選定に多大な御協力をいただいたことは、今でも感謝の思いでいっぱいです。

学び続けることにおいて最も大切なことは、思いの強さです。大学に移籍する前の数年間に会った先生たちには、教科に関係なく、教職に就いて10年~15年を一つの区切りとして大学院進学を勧めてきました。10年が経過する頃には、学校では中堅教員として教科指導や校務分掌において、責任を伴う任務を担当す

ることが増えてきます。これは、他の職場でも当てはまると思います。その頃に大学院進学を実現するためにも研究テーマ発見につながる日々の研鑽と自己投資を怠らないように、先生たちに助言してきました。また、中学生・高校生や大学生には学び続けることの大切さを伝えてきました。

2024年現在、LEISの教育プログラムは、私が通学していた当時より多彩な科目が増えています。英語教育学コースに在籍しながら、日本語教育学や言語学・コミュニケーション表現学で開講される科目を選択することも可能なので、物ごとを多面的・多角的に見る視点をもつことにもつながります。LEISで学ぶことが、教育現場に限らず、多種多様な職場での実践や人間関係に大きな波及効果を生み出すことは間違いないと思います。